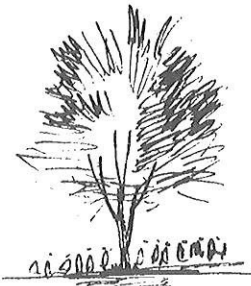


光の子



No.125 2007.6.1

●今年の聖句 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。(マタイによる福音書16:26)



Reko.

挿絵・中島英子

「梅雨の午後」

「光」

落合 水尾

さくらんぼ光の窓のひとつづつ

風薫る野の上空に一川に

新緑や水より上がる山の音

ちらちらと出て来てはつと散る目高

風出でて燈心草も昏るころ

女神よりやさしき微笑夏帽子

布袋草光りて余る利根の水

(「浮野」主宰)

自由は面倒なことに振り回される 愚かさのなかに見出すことができるかもしれない

評論家 芹沢 俊介

ルカ伝第十章二五～三七は、善きサマリア人の物語として知られているものだ。

イエスを試そうとして、ユダヤ教の律法主義者が投げかけた「隣人とは誰か」という問いに、イエスが諭えでもって答える場面である。イエスの諭えをざっと要約してみる。

一人のユダヤ人がエルサレムよりエリコに向かう途中、強盗にあつて身ぐるみ剥がれ傷を負った。その傷を負って倒れているユダヤ人を、ユダヤ人司祭は見て見ぬふりをして通り過ぎた。その後によつて来たレビ人も同様、無視した。レビ人もユダヤの律法を信奉する秩序の人なのだ。そこに旅の途中のサマリア人が通りかかった。サマリア人は倒れているユダヤ人を助け起こし傷の手当てをし、宿屋に連れて行つて介抱し、お金を宿の

主人に預けて、これで怪我人の世話をしよつてほしい、足りない場合は帰りに支払うから、といつて旅立って行つた。

イエスは問う。三人のうち誰が傷だらけで倒れている人の隣人か。ユダヤ人司祭か、レビ人か、それともサマリア人か、というように。ユダヤ教の説教師は、サマリア人だと答えた。ならば、あなたもサマリア人のように振舞うがいい、そうイエスはいつた。注を加えておくと、サマリア人は、ユダヤ教の信奉者からすると敵対者である。窮地にあるユダヤ人に同胞の人たちが知らん振りをし、敵対しているはずの旅の途中にあるサマリア人が救いの手を伸ばしたのである。

私はキリスト信仰を持つ者でも、聖書研究者でもない。だがこの場面はずつと気になつてい

た。隣人とは誰か、隣人愛とはどのようなものか、イエスは疑問の余地なく答えているようにみえた。

誰にとつての隣人か。イエスは他者一般だとは一言もいっていない。もつと具体的に、今まさに倒れており、今のままでは自らの力で立ち上がれない状況に心ならず置かれてしまつた人にとつての隣人であり、その人に自分を差し出し、その人の困難を受けとめ、ふたたび一人旅を続けてゆくことができるための一助を提供するのが隣人愛ということだといつているようにみえる、そのように理解してきた。当然、隣人になるには、何をおいても自分を倒れている人のまゝに無償で差し出せなくてはならない。問題はこれ無償の贈与の契機である。

ところでこの物語の告げる真理を、もつと自分の卑属な現実

に即した言葉に置き換えるとなつた。人は目の前のほんとうに困窮地に陥つてい

アジアで出会った子どもたち…①

フィリピン・サトウキビ畑で働くジーナ

アジアプレス・インターナショナル所属
映像ジャーナリスト
刀川 和也

『きける希望』（白井隆一郎訳）を読んだ。この本をつらぬく命題を歴史家でありキリスト者であるイリイチは、「最善の墮落は最悪」という言葉でもって表している。西欧の近代はキリスト教の墮落の結果である、それは十二世紀をターニングポイントとしてはじまつたという衝撃的な見方（仮説）を、善きサマリア人の物語——隣人愛——を核に展開している。

イリイチが墮落と指摘するのは、隣人愛の制度化である。隣人愛の制度化は墮落として自覚

されていらない。むしろ逆に誰にでも歓迎される最善の姿として認識されているのだ。

隣人愛の制度化はキリスト教会とキリスト教慈善団体の社会的地位を高める結果と引き換えに、キリスト教精神の空洞化をもたらした。それは例えば、人間と人間との間でなされる自由な創造としての隣人愛である福祉が、サービスの提供機関とそれに依存する人たちの関係に矮小化されている現状に如実に現れている。

イリイチはこう述べている。

朝六時になると、村の幹線道路沿いには三十人ほどの人だかりができる。サトウキビ畑で働く労働者を農園まで運ぶ、「ピックアップトラック」を待っている人たちだ。日焼けでどす黒い顔をした労働者たちは、各々、手には鎌を持ち、男はタバコをふかしたり、女は座つて世間話をしたりしながら、トラックが来るまでの時間をやりすごしていた。その中にジーナもいた。小学四年生のジーナは、まだ十歳になつたばかりの女の子だ。

窮地に陥つてい

も、一定の愚かさが必要だ。つまり贈与の契機は愚かさなのである。私たちは、その愚かさを無用な物として追放してしまつたのではないだろうか。その分、確かに利口になつた。利口な人たちが隣人愛を制度化し、システム化してきた。自分がサマリア人の立場に立ちたくないばかりに。今その勢いは急激に増している。愚かさを私たちの手に取り戻すにはいつたいどうしたらいいのだろうか。

眠そうな顔で、父親に寄り添つて立つていた。

つぶされそうになりながら、ジーナは、すし詰め

「来たぞー」という掛け声でみんな立ち上がり、やおら準備を始める。轟音を響かせて、十トントトラックが到着すると、ファン、ファンとクラクションを鳴らした。荷台には、どこかで載せてきた数人の人夫たちが眠たそうに座つていた。道路脇で待っていた日雇いの労働者たちが次から次へと荷台へと駆け上がつていく。ジーナも父親の手をかりて飛び乗る。大人たちに押し

するミンダナオ島の小都市、ジ
エネラルサントス市から車で南
西へ三時間ほどの距離にある。
人口四百人ほどの小さな農村だ。
そこからトラックで、一時間ほ
ど揺られてサトウキビ畑へ向か
う。収穫の時期を迎えてサトウ
キビは大きく成長し、その背丈
は優にジーナの身長の数倍の高
さになっていた。「サトウキビ・
プランテーション」は広大で、
視界の先まで広がっていた。

なことにはジーナはまったく気
にも留めず、黙々と仕事を続け
ていた。
昼休みをはさんで、午後四時
に仕事はようやく終わった。父
親の一日の労働収入は百円にも
満たない。ジーナが働くことに
よって、それが約一・五倍にな
る。父親だけの稼ぎでは一家五
人を支えることはできない。娘
たちの収入をあわせてなんとか
家計をやりくりしているのだ。

鉛筆を持って現れた。竹を張つ
た床にちよこんと座り、ノート
を広げ、自分の名前をアルファ
ベットで綴る練習を始めた。
「明日はお姉ちゃんが働きに出
るから学校に行ける。」とジー
ナはうれしそうに言う。授業の
遅れをとりたくないジーナは復
習に余念がない。
「将来は何になりたい？」と聞
くと、「学校の先生」とジーナは
言う。

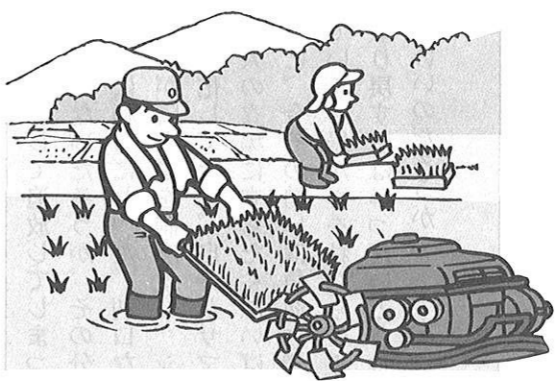
より豊かではないかと思える。
朝起きると、ジーナが朝食の
準備の手伝いをしていた。薪を
割り、火をおこし、湯を沸かし
ていた。朝食はトウモロコシを
つぶして作ったお粥。サッサと
たいらげると、ジーナはアイロ
ンを丁寧にあてた制服を身に着
け、うれしそうに「行ってきま
す」と声をかけ、駆け足で登校
していった。

「バサッ、バサッ、バサッ」、
と甘い汁のつまったサトウキビ
を順番に切り倒していく。刃の
こぼれた鎌の切れ味は悪く、何
度も振るわなければならぬ。
顔には大粒の汗がふきだしてい
る。炎天下での過酷な労働だ。
ジーナの可憐な姿に見惚れてい
ると、彼女の腕にうっすらと血
がにじんでいるのが見えた。よ
くみると、幾筋もの擦り傷があ
る。腕だけでなく、ジーナの日
焼けした真っ黒な顔にも擦り傷
がいくつかあった。サトウキビ
の葉のへりは意外と鋭い。長い
葉をかきわけながら進むときに、
顔と腕を葉にたたきつけられ、
薄く皮膚を傷つけられる。そん

その日、私は、ジーナの家に
泊めてもらえることになった。
竹を組んで建てた、質素な高床
式のジーナの家は小高い丘の上
にあった。はしごのような細い
踏み板の階段を上がり、家の中
へ入ると、母親が鶏の丸焼きを
作っているところだった。ジー
ナ一家に鶏を買う余裕なんてな
いはず。私のために無理をした
に違いない。フライピンの人た
ちは、客人に対しては最大限の
ホスピタリティでもてなす。
借金をすることもしばしばだ。
申し訳ないな、と思いつつも
ご馳走になった。
夕食を終えると、ジーナが右
手にろうそく、左手にノートと

ト商品を世に送り出した、おもちゃ
制作会社、タカラを創成した佐藤安
太さんと言う方で、理工学研究科の
博士課程に入学しました。入学式に
も参列され、私が告示のなかで佐藤
さんを紹介し、お立ちいただいたの
ですが、手を掲げて挨拶をされ、参
加者全員から盛大な拍手が贈られま
した。年齢八十を超して大学で学ば
うとする方は、やはりおしゃれな方
で、その服装などもしつかりと決まっ
ていました。私にとつても6回の入学
式の中で、最も晴れやかな入学式で
した。佐藤さんに感謝しなければな
りませんね。

も終わって余興に入ったのですが、
そこで卒業生によるピアノの連弾が
披露されました。その一人が柔道部
の女子学生でした。私の自宅で医学
部柔道部のコンパの二次会でカレ
ーを作ることは「光の子」でも何回も
紹介しましたが、その女子学生はよ
くカレール作りの手伝いをしてくれ
た子でした。
ところが、演奏が始まって私はす
っかり固まってしまいました。曲は
現代音楽で、しかも演奏がほとんど
プロなみなのです。あとで彼女に聞
いたところでは、まだ存命中の作曲
家の手になるものだとのことでした。
彼女のどこにこんなエネルギーが潜
んでいたのか、津軽出身の色白の控
えめだった彼女のまさに情熱的な演
奏を聴きながら、なぜか涙が止まら
ない私でした。



季節に関連した文章は、皆様がそ
れをお読みになるころは季節はずれ
になっているのが常で、書く方とし
ても気が引けるのですが、ご勘弁く
ださい。

卒業式・入学式の季節

学者もどきのつぶやき ⑦⑧

四月十三日に山形大学付属幼稚園

山形大学
山形大学
仙道
富土郎

の入園式が終了
し、私が学長と
して告示を述べ
なければならな
い卒業式・入学
式はすべて終わ
り、正直なところ
ほっとしてい
ます。二〇〇五
年度から附属
学校（小学校、
中学校、養護学
校、幼稚園）が、
教育学部附属か
ら山形大学付の
所属に変わり、
そのすべての卒
業式・入学式で

も学長が告示をすることになりま
した。それに加えて、山形大学は分
散キャンパスで、大学の卒業式は山
形地区、米沢地区（工学部）、鶴岡
地区（農学部）の三方所で行われて
おります。都合、各年度、12回私は

モーニングを着用し、告示を述べる
こととなります。
一番大変なのが、幼稚園の卒園・
入園式です。幼児に理解出来る言葉
を選ばなければならず、内容も彼ら・
彼女らの心に響くものでなければな
らないということで、私はほとんど
悶絶寸前といった恰好です。しかも、
保護者（最近では父兄という言葉は使
いません）にも語りかけなければな
らず、混乱の極みです。実は大失敗
をしたことがあります。附属幼稚園
の100周年の記念式典の祝辞で巻物に
した紙を取り出して「附属幼稚園の
100周年にあたり……」と格調高く始
めたところ、最前列一杯座っていた
幼稚園児たちは、当然のことながら、
きょとんとした顔をしております。
困ってしまい、「あとで父さん、
お母さんから聞いてくださいね……」
と付け加えて、なんとかその場を取
り繕ったのでした。まさに冷や汗も
のでした。

卒業式・入学式にはいろいろな工
ビソードも生まれます。全国紙でも
紹介されましたので、ご存じの方も
いらつしやると思いますが、今年、
山形大学には83歳の方が入学しまし
た。だつこちゃん、チヨロQ、リカ
ちゃん、人生ゲームなど数々のヒツ

この季節には、思いも寄らなかつ
たことも経験させられます。卒業式
の終わったあとには、各学部で謝恩
会が開かれるのですが、学長は大忙
しです。まずは、山形キャンパスに
ある人文学部、地域教育文化学部、
理学部の謝恩会に毎年順繰りに出席
します。今年は人文学部の番でした。
挨拶もそこそこに、次ぎは医学部看
護学科の謝恩会に出席し、ビールを
一杯飲んだころには、私の出身の医
学部医学科謝恩会からの迎えの学生
がやってきます。
私にとつて衝撃的な出来事は、医
学科の謝恩会で起こりました。挨拶



まさひろさん

中島 陸雄

彫刻家の舟越保武という人が「巨岩と花びら」という本を出している。この人は東京芸大の教授というよりも、一般には長崎の二十六聖人の像を作った人という方が、わかりやすいかも知れない。

この人が芸大を退職する時に、学生からユニークな卒業証書をもらったことが「巨岩と花びら」の中に出てくる。

卒業証書 舟越保武殿

貴殿は、東京芸術大学美術学部彫刻科に於いて、長年教職にありながら、およそ私たち学生を指導、教育することなく、自らの制作に励み、彫刻科の歴史に残る程、アトリエをコンパに、ディスクに、コピーショップにと、フルに活用され、ユニークな教育者のあり方を示されました。その業をたたえ、当大学に於いて、その課程を立派に修了されたことを証明します。

昭和五十年二月二日

東京芸術大学美術学部学生一同 印

これは大変おもしろい。「およそ私たち学生を指導、教育することなく・・・」

という部分など、実に印象的である。

しかも、この全文から感じられることは、学生たちが、どんなに大きな尊敬の念を持っていたか、そして、先生がどんなに大きな愛情で学生たちを包んでいたか、ということである。恐らく「ここはこう削れ」とか「ここにはこんな風に粘土を付けるんだ」とかいふ細かい技術的な指導は余りされなかったであろうが、学生たちは、もともと大きな言葉では表現できない程の教育を受けていたものと思われる。そうでなければ、あのような、一見失礼極まりない文章を先生に差し上げることができない筈である。

「これは、学生主催の送別会のパーティの席上で、学生代表が声高々と読み上げて、私がつうやうやく一礼して頂いた。」と述べてある。この時に記念品として大きな肘かけ椅子をもらったそうだが「卒業証書とこの椅子が、いま、我が家の家宝になった。」とも記されている。

あたりまえの文章よりも、この逆説的な表現の中にある学生たちの、深い敬愛の念も、先生にとっては、この上

なく嬉しいものであった筈である。

私は一読して、これはおもしろいと思つたと同時に、全く別なことを思い出していた。

この文章に出会う以前に、似たようなことを、小学校以来の同級生、まさひろさんに対してやったことがあったから。

まさひろさんは、我々が小学校四年の時、旧満州から引き上げてきた。教室では私の隣の席であった。頭の良い、トンチが利いていて、イタズラで、茶目ツギにあふれ、無類に人の好い、みんなから愛される少年だった。

或る時、作文の宿題が出され、書いてきた作文を、みんなの前で読むということがあった。まさひろさんの番になると、彼はノートを持って前に出て、ゆつくりと読み始めた。大変細かい描写で、長々と、時々ページをめくりながら読んだ。先生は「素晴らしい作文です。」と大いにほめた。読み終わって席にもどつた彼のノートをのぞいてみると、何と、ノートには何も書いていない白紙なのである。私はびっくりして「先生、まさひろさんの帳面には何も書いてありません。」と告げ口をしてしまった。教室中がびっくりしてざわめいた。先生も、彼のトンチの良さに呆れてしまったのか、余り強くは

叱らなかつたと思う。

中学生の時である。私と別な友達の食べ終わった弁当箱をわざと取りかえてカバンの中に入れておいたことがあつた。何も知らずに家へ帰り、カバンの中の新聞紙の包みを開けてみると、全然別な弁当箱が出てきた。「さては、まさひろさんまたやったな！」と、やられた本人が笑ってしまったのである。彼の人間性の好きをみんな知っているから、怒る人はいない。

四十歳を過ぎたころからだつたらうか、彼は安くて楽しめる旅行を計画し、みんなを引っぱっていつてくれた。もう、それが三十回以上である。ちょうど二十回目の頃、あんなに骨をおつてくれるんだから、まさひろさんに何かお礼をしようという話を持ち上がった。そこで、私が感謝状を作って旅先で渡した。

「感謝状 あなたは、余程やる事がなく、ヒマを持て余しているとみえて、一銭にもならない旅行計画を作り、大骨をおつて我々を引っぱりまわし、楽しませてくれました。・・・記念品を添えて一同の感謝の意を・・・」としてみた。まさひろさんはあの感謝状を舟越氏と同じように家宝にしているだろうか。

プラットフォーム

あかり窓

心理室より

今年も中庭の桜が新年度の始まりに彩りを添えてくれました。皆様はどのような春を迎えられたでしょうか？

この春休み、私は新高校一年生を昔風情のある奥秩父の民宿に連れて行くという旅行に同行しました。

施設に入所している子どもたちの大半が、自分の意志に反して養護施設に入所しています。しかし、義務教育を終えた時点で、子どもたちは養護施設で生活しながら高校進学することを自ら選択します。その選択をしたことに対する覚悟を新たにさせ、自分の人生に向き合わなければならぬことを伝えるための旅行でした。じつと話を聞いている子どももいました。でも聞いている子どももいました。でも聞いている子どもにも何かしら伝わったことと思います。

話に耳を傾けている子どもたちの側で、私自身が今の仕事を

選択したことへの覚悟を新たにさせられました。そして、自分

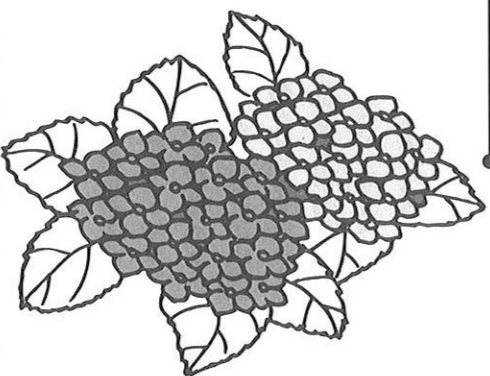
から歩き始めた子どもたちの前途に苦難があつたとしても、それを乗り越える希望があると私は信じ続けようと思いました。

積 みどり

光の中で

佐藤家

桜咲く4月、それぞれが新学期に上がり、一回り大きくなつた姿で生活をスタートさせました。身体測定で、身長がcm伸びた(体重のことは女の子たちは言いませんが・・・)という報告をしてくれたり、新しい部活に入り、大会に出ることを目標に頑張っていたりと、4月は成長を感じる場面が多いです。そんな中、私が一番成長を感じる場面は、朝の登校時です。学校に向かう子どもたちの背中、小一の子ですらたくましく見えます。成長し続ける子どもたち



に、どれだけ内省しても前へ進むことができず自分自身は、置いてけぼりにされるようで、少しさびしいような、元気が付けられないような心境になります。今日も怪我もなく、元気に帰って来ますように・・・と思いつつ、それぞれの背中を見送ります。

田口 貴子

原田家日記

皆様いかがお過ごしでしょうか。

春は別れと出逢いの季節。原田家の子どもたちもこの春、た

くさんの別れと出逢いを経験しました。高野グループの子どもたちは、遠藤保育士の退職によりとても身近な人との別れを、そして高野保育士との出逢いを経験しました。

私のグループはというと、5人中4人が卒業、入学、入園等を迎え、この上ないほど多くの別れと出逢いに触れる春でした。現在、夕食中の会話の多くは、彼らが新しい環境から持ち帰る土産話です。このとき私は心のアンテナを最大限にあげ、彼らの話を傾けます。この春に経験したたくさんの出逢いが、より良きものとなるように・・・。

鈴木 晶子

子どもたちの季節 仙道家

4月も半ばを過ぎ、だんだんと新学期の緊張感から疲れが見え始めています子どもたちの姿があります。皆様はいかがお過ごしでしょうか。

この春、中学校に入学した清貴は部活選びに頭を悩ませています。入学前からバスケットに興味があつた清貴は仮入部でもバ

スケ部の練習に参加してました。しかし、練習が始まって3日目・・・練習に参加せず帰宅し部屋で毛布にくるまって清貴がいました。初めは「お腹が痛いから帰ってきた・・・」と言っていましたが、ゆつくり話を聞くとバスケットをやったいけど練習についていけないから先のことでした。「これから先の自分」について悩むことのできる彼を見てまた一つ成長を感じました。翌日「仮入部期間だからいろいろ見ておいで」と声をかけると「今日は卓球部に出てみる」と言い登校しました。たくさん悩みながらも少しずつ前に進んでいけるようにこれからも清貴を応援していきたいと思いました。

牧野 由紀子

季節のおとずれ 竹花家

新年度の竹花家は、例年にまして慌ただしく始まりました。一番の理由としては、五月の始めに今までの古い貸家から今家で倉沢家を使用していた家に引っ越すことになったからです。

ちようどこの時期、五月四日に

は光の子どもの家の大イベントのひとつ「子ども祭り」があり、両方の準備をしながら引越しの作業をするようになりました。そんな忙しさにもかかわらず子ども達は頑張つて各々の荷造に精を出しました。特に長女の貴子は子ども祭りの委員長も兼ねながら子ども達の引越しの陣頭指揮と大活躍で大変助けられました。新人の遠藤陽子保育士も入っていきなりの慌ただしさで大変だったと思います。

六月に入り新しい家での子ども達の生活もようやく落ち着きを取り戻してきました。

それにしても、人間不思議なもので古い家に色々文句を言っていました。約五年近く住み慣れた家を離れることになる寂しい気持ちになるものです。五月のある日、昔の家に後かたづけに出かけました。静一と毎日のように相撲をとった長い廊下、雑草だらけの畑、伸び放題のハーブガーデンをぼんやりと眺めながらこの古くとも思い出が詰まった家に「ありがとうございました」と別れを上げまし

た。

そして、何よりも寂しいのは、いつも私たちに暖かなお励ましをいただいたり、子ども達が気軽に遊びに行けたご近所の皆様とのお別れです。この地域の中、今まで子ども達が成長してこれたのも皆様のお支えなしではやっていくことができませんでした。本当にありがとうございます。

穴水 祐介

河のほとりて 倉澤家

倉澤家は、ゴールデンウィーク前半で同じ町内の大きな家に引っ越し、5月から新しい環境での生活をスタートさせました。そして、成黎は近く離れた学校へ元気に登校しています。

さて、私と成黎のその後ですが、春休み中に私の実家を訪問し、両親に挨拶をする…という計画は様々な事情で実現できませんでした。成黎は小学校という新しい世界に足を踏み入れたこと、そして新しい家への引っ越しなどで精一杯だったのか、しばらくの間、私との結婚(?)について口にするがありませんで

新任職員の声

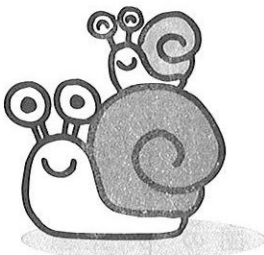
はじめまして。今年度より、光の子どもの家の指導員としてお世話になることとなりました鈴木康孝です。

仕事を始めて半月が過ぎ、生活面だけでなく、職員・子どもとの関係にも落ち着きが見られ、充実した日々を過ごせています。今は距離を置いた『ぎこちない』子どもとの関係ですが、生活を共にする中でお互いを知り多くを共感していくことで少しずつでも良い方向へ変わっていくたら・・・、と思っています。又、入ってきたばかりとすることもあり、対応や連携の仕方など、所々で分からない部分があります。そういった無知の状態を無くすため、学ぶ心を忘れず、常時理解に努めて行きたいと考えています。

幸い、今年度は新人が3名居るため、苦手なところを共有し合い、切磋琢磨して行けるよう努力して行く所存です。

ご迷惑をおかけするかと思いますが、よろしくお願いします。

鈴木 康孝



初めまして、この4月からグループホームの竹花家の担当者となった遠藤陽子です。不安や緊張が入り混じった気持ちでのスタートとなりましたが、いきなりやってきた私のことを、子どもたちはとても明るく迎え入れてくれました。きつと子どもたちの心の中は色んな思いでいっぱいなのだと思います。しかし、そんな彼らの気持ちの温かさ、優しさ、素直さ、そして内にある強さにたくさん助けられていながら、少しずつ生活の中に入っていき、そんな毎日です。私は「脳みそから不器用だ」と弟に言われるくらい、出来ないことがたくさんある人間なので、自分の余裕のなさから皆さんにご迷惑をおかけすることばかりですが、助けたいただきながら少しずつやっていけたらと思います。

自分が日々感じることを大切にし、子どもたちの思いには常に立ち返りながら、私が竹花家に居ることが子どもたちにとっても、私自身にとっても自然になっていけるように、そして子どもたちが一緒にいて安心できる存在になっていけたらと思います。これからよろしく申し上げます。

遠藤 陽子

はじめまして。4月から原田家で働かせていただいている高野真夕子と申します。

子どもたちと一緒に生活を始めて半月が経ちました。まだまだ分からないことが多く、子どもたちを戸惑わせてしまうことがあります。毎日、他の職員の方や子どもたちに助けられてばかりです。今の私は子どもたちにとって、頼りない存在なので申し訳なく思っています。毎日が精一杯で、先を考えると気ができずに不安になることもあります。子どもたちの存在に救われ、楽しい日々を送っています。

高野 真夕子

これから少しずつ生活の流れをつかんで、子どもたちが安心して楽しく生活できるようにサポートしていきたいです。また、子どもたちにとってもここが安心できる場所になればよいと思います。

私一人ではできないことが多すぎて、ご迷惑をかけることが多々あると思いますが、どうぞ宜しくお願いします。



家族に関わる その18

菅原 哲男

虐待を疑われた親や家族は、一様に虐待を否定する。児童相談所の地区にもよるが、虐待を否定する家族と現実起きている事実を巡っての厳しいやりとりは日常的だという。批判もし合いながら親しくさせてもらっている児童福祉司が、ため息をつきながら「私たちが嘘をついて、あの父親を虐待の父親にしたがつているように言われると...」と肩を落とした。

虐待というコトバは何とも響きが悪い。不適切な関わりなどといったりもするが、余りイメージが伝わらない。誰でも「おまえは自分の子どもを虐待しただろう」と詰問されて、「ハイそのとおり致しました」と答えるにはかなりの鈍感力や諦めが必要だろう。通告された多くの親たちは、自分の子どもにしたことどもについて相当ハードな対応をしたとしても、不適切ではあるだろうが虐待ではない、というだろう。子どもたちへのルールを破ったことでの締め出しや、身体的な実力行使が嫉という範疇にあったと親たちは言い開きを続けた。

果たしてしつけと虐待の間にはどのような違いや区別があるのだろうか。

立ち位置によってはこれは果てしない議論になる。とりわけ無視や存在を喜ばないなどの心理的虐待などは立証が困難で、子どもにとってはかなり身にこたえるものである。

しつけと虐待について現実的にはどちらともとれるキワキワの状況もあるだろう。アセスメントの重要で困難な場面でもあり課題でもある。

一の母親が実父と離婚して義父と再婚をした。だからかなり年の差のある弟妹を持つことになった。

義父は前夫の子どもたちと、自分の子どもたちとの間にあるような生物学的な関係はないが、前夫の子どもたちを自分の子どもと同じように「愛して」育てようと結婚前から心に深く決めていた。

家族にとつての生物学的な関係の有無について、この数十年ほどの間にそれは重大なことではなく交換可能な関係の一形態に過ぎないなどという、特にフェミニストたちの言いが幅をきかせてきたように思う。しかし、そうだろうか。一たちの場合は、そのことの意味を見落としたら、彼らの処遇にかなり方針の違いをもたらしただろう

と考えられる。

再婚をした相手が実父などかなり近い関係にあるものであったところから問題は複雑になる。実父も義父も母親も親しい知り合いであったのである。義父は母親を深く愛していたという。かなりな難題も引き受けながら家族として振る舞うように心を尽くしてきたことを後で聞いた。母親も義父を愛していた。実父の子どもたちにはつらく当たるように関係に意図的なアンバランスをしていたようだ。

二人の間に「愛」といえるような関係があった場合、相手が自分以外の男性と子どもを産むほどの関係になってきたことの証明としての存在に前夫の子どもたちが見えてきたとしても無理からぬことだろう。かなり固く決意したとしても、人の決意は日常性のエネルギーに押し切れられ、摩耗していくのが常だろう。その先にあるものは、この子どもたちが前夫と連れあいの愛の果てであることが切実な感情をもたらすことになるだろう。その子は前夫と顔立ちや立ち居振る舞いが似ていたとしても不思議ではない。それを見聞きしたり同じ空間にいることがたまらなくなることもあるだろう。そんな空気を母親が悟るのにそう時間はかからない。母親が義父への思いから前夫の子どもたちに厳しく当たり、家が子ども

送つていい物といけない物。贅沢な物は×だけれど、みじめな思いにさせ過ぎないように嗜好品は少しなら○。あのメーカーのゼリーが好きだったつげ...。手にとっては戻し、やつぱり...。と元の棚に戻ったりしながら、私なりの厳選品となりました。

家で書いてきた短めの手紙――頑張るだけ頑張りなさい―散々迷ってお金は送らないことになりました。正しかったのかどうか、今でも迷っています。数日後、萌季からメールが届きました。「ありがとう。助かります。」 私たちの働きはシャドーワークだと言われます。彼女彼らが求めなければ、そのまま消えていく存在です。かけがえのない一対一の関係を目指しつつ、私

現場から

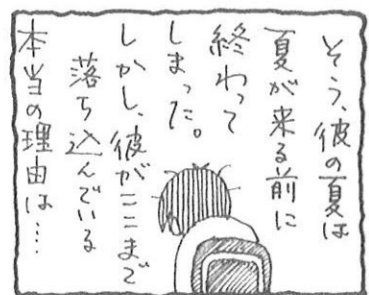
続・光の子らしく

26

岩崎 まり子

桜の花はすっかり散ってしまいました。地面のあちこちにかわいらしい花々が咲き、この季節は本当に人を飽きさせませんね。

皆様、いかがお過ごしですか。それまで割と頻繁にあった萌季からの連絡がばったりとなくなり、最初は、いい人が出来たのかな などと思い、ニヤニヤしていたのです。が、さすがに何度メールをしても返事が来なくなつてくると心配で、想像は果てしなくマイナスの方向へと拡がっていき、これは、今すぐにも彼女のアパートへ乗り込んで助け出さなければ...!



などと思った矢先、電話がありました。「元気でやっつてるの?」「元気だよ。」「...ちゃんと食べてるの?」「ん...まあ...大丈夫。」「...米とか送ろうか?」「うん、助かるかも...。どうせ暇だから、そっち行こうかな。」「いつでもおいで。待つてるよ。」「理奈も会いたがってるよ。」「理奈かあ。会いたいなあ。」「いつでもおいでよ。」「そんなやりとりの後、近所のスーパーで、彼女の声の調子から表情を思い浮かべながら、あれこれ送る品物を見繕いました。

クだと言われます。彼女彼らが求めなければ、そのまま消えていく存在です。かけがえのない一対一の関係を目指しつつ、私

たちにとつてつらい時間と空間になっていったらうことは充分想像できることだ。一にとつて家がつらい場所になり帰りたくなって、嘘をついても友人たちの家に立ち寄り、街をぶらぶらしたりしながら、できるだけ遅く帰るようになっていった。呼吸するように家には「門限」がもうけられた。そしてそれよりも遅く帰るようなことが日常化して、ついには締め出しに合い、学校への出席も不規則になり、虐待の通告となったものである。義父は特に「やつぱり！」と色眼鏡で見られることを強く意識した。虐待という不名誉な自らにつけられた真新しいラベルに強く抵抗も感じていた。それに伴い自分が施設を利用することについても抵抗感や情けなさなど複雑な感情・情緒を持ち続けていたのである。だから、入所の場面はかなり険しい物言いと、不快な感情がむき出しに表現されていた。何とかなだめて、私たちの、こうすれば大丈夫という方法を持っているわけではない。これからこの子どもにとつて最もよいと思われる、暮らしの場面や人との関わりについて考えながら話し合つて求めていこう、という提案をして入所手続きを終えたのである。

感謝

皆様のあたたかいご支援、ご協力により、

さる6月2日(土)、「ちいほくも大バザー」を

光の子どもの家にて行うことができました。

売り上げは、565,454円でした。

皆様には、心より感謝申し上げます。

光の子どもの家 バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2007年2月1日▶2007年3月末日

2007年2月

- 3日 クリスマス・ケーキ 土用のウナギご飯など季節のおいしいプレゼントでご支援下さっている(株)ステラ様より、恵方巻きを、お腹いっぱい！感謝
- 8日 埼玉県立高校前期入試で育実、靈也が合格
- 9日 近年埼玉県養護施設で多発した不祥事の解消のための施設間相互宿泊研修に児童養護施設「ふれんど」より田中指導員、増田保育士が来訪 17日まで
- 24日 大利根藤幼稚園作品展 いつも心配な子どもたちの力作に大感動の半日

2007年3月

- 5日 施設間相互宿泊研修に児童養護施設「あゆみ学園」より荒木指導員来訪9日まで
 - 6日 埼玉県立高校後期試験に龍治合格 夕食時に3名の新高校生の合格祝いを、元職員、家族、友人、教師たちなど大勢で、盛大に
 - 10日 埼玉県立不動岡誠和高校卒業式 有由卒業
 - 15日 大利根町立中学卒業式 3名卒業
 - 床屋さんの田村氏散髪ご奉仕 サッパリと 感謝
 - 17日 大利根藤幼稚園卒園式 3名卒園
 - 23日 大利根町立原道小学校卒業式 2名卒業
 - 24日 第10回出発の会 今年は有由が一人だったが、町議会、教育長、後援会教会学校など多くの心ある方々をお招きして盛大に励ましと感謝を
 - 26日 有由無断外出
 - 29日 町内の篤志家宅に有由がお世話になっていると判明
 - その後篤志家宅の強力なご支援 心から感謝
 - 芝山冬子一時保護 仙道家牧野保育士担当
 - 30日 第82回理事会
- この間の献品者 斉藤ふとん店 川島商店 横村澄美子 臺工務店 藤本 曜子 松本明子 坂本和加子 倉澤園子 ダイエー 新井俊子 あゆみ学園 吉松みどり 坪井 山野井 田沢優子 スーパーかきや他の各位様 感謝して励みます (<5)

コラム

数年前の今頃、高校生が性非行で補導された。中学始め、児童自立施設か光の子どもの家から児童相談所が迷ったという入所の子だった。不適切な関わりで幼少期を過ごした子どもは一般的に衝動性が強い。日常的な衝動性の表現の連続の中で、特に担当保育士の並々な努力によって高校進学を果たした。身近な者への衝動が対外的になり、性衝動と相俟って常軌を外したものと化した。その時私たちは実に10年ぶりに高校中退者を出した。入所直後から当該児童相談所に特に衝動性への対応について心理的リアセメントを依頼し続けたが、ここにいる3年余りの間実現遂にしなかつた。私たちの足りなさには児童相談所のサポートも積み重ねて極めて困難な社会的自立へ、私たちの伴走は今も限りなく続く。

反 射 光

☆☆☆☆

☆灰色の雲間から強い日差しを受け年度初めには危うげだった新入生たちが相応の顔立ちで駆け戻ります☆☆児童福祉週間を記念して芹沢俊介氏に玉稿を頂きました☆子どもたちなど弱い者たちの居場所である福祉の在りようが問われる時代に、芹沢氏の筆はそのような福祉現場の方向を示し打ち据えま

☆☆先頃村瀬嘉代子大正大学教授をお招きしてケース会議を致しました☆私

たちを悩ませ続けている子どもたちの衝動性と暴力、ケータイと性などについての質問に「お花屋さんのものでもなくともいい、野に咲いている花をそつと生ける、そんな暮らしの心を大切に」と明解に論されました☆☆両氏のいっ

もながらのお交わりに感動を覚えまし

た☆☆23年度目の歩みも相当な困難や予測不能な痛みが待ち受けます☆☆それらにモノや力ネでは不能な、応援を惜しまない方々、大人同士の、子どもどうしの関係の豊かさこそが光の子どもの家の安全保障と心して参ります☆☆

るしくお願ひします。(のぶ)

☆☆☆☆